

補聴器を活用するために

補聴器を活用するには、高額な補聴器の購入を考えるより、もっと大切なポイントがあります。それは、メガネと違って補聴器にはトレーニングが必要なことです。基本的なことですが、あまり知られていません。

音を聞いているのは脳であり、補聴器で得られた新たな「聞こえ具合」に対して脳が回路を組みかえる必要があるからです。そのため、ずっと聞こえない状態で過ごしていた方にとって、補聴器を始めて装着すると周囲の騒音も全て聞こえてしまうので「たいへんうっとうしい」状態になります。ここで、「こんなやかましいものは使えない」とあきらめてしまう方は結構みえます。たいへん、残念なことです。適切な調整と少しのトレーニングによって生活はずいぶん楽になった可能性が高いからです。



普段、脳はとても賢い働きをしています。騒々しい喫茶店で会話をしている時、いつの間にか会話の相手以外の周囲の音は意識に上がらなくなっています。これは、脳が不必要な音を意識に上げないようにコントロールしているからです。また、この状況で遠くから自分の名前を呼ばれると騒音の中でも結構気付くことができます。これも脳の働きで、自分にとって必要な音と不必要な音を無意識に識別して意識に上げているからです。これらの現象を、「カクテルパーティ効果」といいます。

この脳の優れた機能は、聞こえの環境が大きく変わるとすぐには有効に働かないことが推測されます。難聴のある方の場合には、補聴器をつけるまで周囲の雑音が聞こえていませんでしたから、補聴器を初めて使用する時に周囲の騒音が気になるのは当然というわけです。

脳は、補聴器による「新たな聞こえ具合」に対して、神経回路を組み替えて周囲の騒音を意識にあげないように設定していきます。一般に、高齢者ほどこの神経回路の組み替えに時間がかかると考えられ、ここでトレーニングが必要というわけです。トレーニングと言っても、少々騒々しい状況から逃げないようにするだけです。

高齢者が初めて補聴器を使用する場合には、音が入りすぎないように抑え気味の調整で始めることも多いため、結果的に3ヶ月程度の時間をかけて補聴器の調整が進むこと(トレーニング期間)になります。この際には、補聴器担当者による親身な説明と適切な調整、患者さんやご家族の十分なお理解が不可欠です。

「こんなやかましい補聴器は使えない」という言葉の裏に、補聴器の価値がないのではなく、別の問題が隠れていることがおわかり頂けたでしょうか。一方、「補聴器をしない方が良く聞こえる」という言葉が聞かれた時にも、実は別の問題が隠れています。この理由を説明するのは機会をあらためることにしましょう。補聴器の聞こえ具合に関する問題には、補聴器の価値が無いのではなく、問題

点を探す必要があるわけです。



一方で、購入しない方が良い場合もあります。

例えば、「ご本人自身が聞こえに不自由を実感していない」時は、安易に購入しない方が無難です。補聴器は少々面倒なものですから、このような場合には結局使わなくなってしまう。つまり「補聴器による喜び」が「面倒な思い」を上まわることが補聴器の継続活用には必要です。したがって、ご家族が補聴器のプレゼントをしようと思っても、慎重に進めないとお金の無駄遣いになってしまいます。

補聴器はこの10年で大きく進歩しました。基本性能が向上していますので、10年以上前的高级機種よりも現在の低価格機種の性能が良いように思います。さらに、現在の高価格機種の持つ機能は、その価格に見合った価値があるかという微妙なところがあります。そこで、決して高い機種の方が無難とは単純に考えないでください。

ところで、騒音下での聞き取りには、両耳で聞くことにも大きな価値があることがわかってきました。したがって、安価なもので構わないので補聴器を両耳に勧めることも少なくありません。ただし、本当に両耳が望ましいかは、耳の状態をはじめ多くの要素がありますので耳鼻咽喉科で必ず相談してください。

補聴器は適切に調整されないと、大きな音による内耳障害の危険があります。そこで、優秀な補聴器担当者との連携は耳鼻科医にとっても大きなポイントです。そして、現在は**認定補聴器技能者**という資格がありますので、この資格を持つ方からの購入をお勧めします。補聴器購入は、その後も続く調整と点検、清掃のために認定補聴器技能者さんとの長いお付き合いが始まる時でもあります。

ところで、補聴器の調整が最終段階に来ているかどうかは「補聴器適合検査」によって判定されます。世間で購入された補聴器は、最終段階の調整に至っていないことは少なくありませんので、補聴器を使っても十分に聞きとれないと感じている方も、購入した補聴器店でこの検査について相談してください。（**認定補聴器専門店**や耳鼻咽喉科の補聴器外来でこの検査は可能です）

補聴器が活用できるようになるには、患者さんやご家族も以上のことを理解している必要性を実感しています。補聴器の限界はありますが、基本性能は随分高まっており、高額な補聴器を考えるよりも、信頼できる認定補聴器技能者の繊細な調整に加えて、使用される人の前向きな姿勢と冷静な判断も大切と考えています。

名古屋第一赤十字病院 耳鼻咽喉科
柘植 勇人

2015.6.30